
トマトと小鳥と薔薇と

によきりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トマトと小鳥と薔薇と

【Nコード】

N3465BA

【作者名】

によきりん

【あらすじ】

悪友トリオである三人がある朝目を覚ますと中身が入れ代わっていた！？

原因も分からず慌てる三人、とりあえずは子分や弟である相棒や隣国にばれないようにしなくては。果たしてどうなるのか――！？

悪友トリオのggdggd物語開幕！！

プロローグ（前書き）

初めまして。初投稿ですが何卒よろしくお願いします。

誤字・脱字があったらすみません。

今回はプロローグです。

プロローグ

その日は世界会議の最終日であった。

今回の主催国はドイツであったが不運なことに高熱で寝込んでしまった。（不況などからくるのではなく単なる風邪であったが）会議を中止するわけにもいかず代理として出席したのは兄であり亡国のプロイセン―ギルベルト・バイルシュミット―であった。

会議はアメリカの無謀な意見から始まりイギリスとフランスは殴り合い、ロシアはいつもの黒い笑みを浮かべバルト三国に恐ろしいことを言い出す。眠っている人や本を読んでいる人、内職を始める人もいる。

ここでは普通ならばドイツが怒鳴ることによって会議がやつのこととでいい方向へと進むが、その代わりにいるのはプロイセン。結局会議はまとまらず議題は次に持ち越し。北イタリアの「パスター！」によって解散となった。

「疲れた……」

ギルベルトの呟きに

「あれがいつもの会議や。ま、俺も疲れたわー」

と関西弁で言葉とは裏腹に楽しそうにスペイン―アントーニョ・フェルナンデス・カリエド―が

「ま、プーちゃん今回主催国だったからね。てかアントーニョ造花作ってのんびりしてたじゃん」

とフランスーフランシス・ボヌフォワーが答えた。

「な、何言うとんねんフランシス！造花作ないと上司に怒られるんやで！上司怒ると怖いんやで！」

「こっちは三日連続であの眉毛に殴られたのよ！痛いしお兄さんのトレビアンな顔に傷がついたんだから！」

ひどいわ元ヤン眉毛！と嘆くフランシスに

『いやそれはお前が悪い気がする』

と言おうとしたギルベルトだったがさらに傷つきそうなのでやめておいた。

代わりに別のことを思いついたのだが

「「「そうだ、酒を飲みに行こう」」」

三人の意見は見事に一致していたようだ。

その後の記憶は曖昧であった。

ワインやビールを大量に飲んだことから三人は見事に酔っ払ってしまった。

ギルベルトが世界会議用に手配したホテルが幸い近くにあったため、一番酔っていたアントーニヨを二人が運び、そのまま三人共ベツトに飛び込み眠りについたのであった。

そして夜が明け不思議な出来事の幕が開ける。

プロローグ (後書き)

悪友三人で飲んだらスペインとか何飲むんだすかね？

ぐだぐだで駄文ですが更新頑張りたいです。 よろしくお願いします
！！

01 始まった朝

三人の中で一番早く起きたのはフランススであった。

彼は料理が大好きなので忙しくない時はいつも作る。

今日はギルベルトやアントーニヨもいるのでメニューについて考え込んでいた。

ドイツん家の料理素材で食え！って感じだから薄すぎて困っちゃう。市場は開いてるはずだから材料は何買おうかな、アントーニヨもいるしトマトかな、あ、でもトマトなくなっってお兄さんの料理世界一だからどんなのでもみんな満足するよね。というかお兄さん自体世界一だよな。やっぱ、立派、俺。

明らかに後半が自分の自慢になっていたが気にしない。
よっと起きあがろうとした瞬間違和感を感じた。

――髪の毛が顔にかかって来てない――

ほんの些細なことだが確かにいつもと違っている。いつもは肩まである長い髪をサッと払い優雅に起き上がる。自分の髪の美しさもしめすこの仕種ができない。

仕方なく起き上がる。そしてふと左を見ると……

有り得ない光景を目にした。

一人はシーツを手繰りよせむにゃむにゃと眠るギルベルト。ここは問題ない。

その隣。隣の人はい…

くかーといびきをかくフランススであった。

「……………！？」

…おかしい。明らかにおかしい。ああこれは夢なのかなと頬をつねると痛い。

夢、じゃない。としたら自分はどっになっているのかとフランス洗面所にダッシュする。

鏡に映っているその人は

01 始まった朝（後書き）

フランスはアントーニョに。

薔薇↓トマト です。

次は三人の顔合わせです
↑

（感想やコメ貰うと作者は飛び上がるほど喜びます。）

02 状況整理

「五月蠅いでフランスス……は？」

「なんだなんだ……何！？」

どうやら残りの二人もこの叫びに目を覚ましたようだ。
フランススが駆け付けると

「何で俺様が関西弁で喋ってるんだ！？意味わかんねえ！」

「そっちこそ！自分一人称俺様なフランになつとるで！？」

ギルベルトとアントーニヨも異変が起こっていた。

「ギル、トーニヨ」

フランススが呼びかけると二人共振り返る

「……ボンジュール」

「嫌やわあああ！！俺がボンジュールとか気持ち悪いやないか！！」

「なんだなんだ……どうなっているんだ！？この状況おかしすギル
ぜー！！」

パニックに陥った。

数十分後。

朝食をホテルの食堂で済まし、三人はコーヒーを手にしテーブルにつく。

「……で？」

「で、って何さ、……えつと確かギルだよな」

「俺様達はどうなっているんだの意味のでだぜ」

「何やるな、……ありえないことやけど入れ代わりとちゃうんかなあ」

入れ代わり。現実には普通ならばないことだが、今正に起こっていることである。

んーと言いながらフランススが三人のデフォルメされた姿を描く。

「そうだとすればまず、お兄さんがトーニヨの姿になっちゃって、とフランススの絵からアントーニヨの絵へと矢印を書く。」

「その俺はギルの姿になっとって」

今度はアントーニヨの絵からギルベルトの絵へと矢印。

「最後に小鳥のようにカッコイイ俺様はキモいフランススとなった訳か……何てこった。」

ギルベルトの絵からフランススの絵へ矢印が追加される。三角形の出来上がり。

「ちよつ、今ギル何ていった！？お兄さんキモくないからね！むしろテレビアン「金髪青目ならルートのほうがイケてるぜ、何たってカッコイイ俺様の弟だからな」人の話を最後まで聞け！」

「というかギル小鳥と同類のかっこよさで自分なんか悲しくないんか？」

フランススのツツコミを遮るように弟自慢をしたギルベルトだったが、アントーニヨの意見はブスリときたようだ。

ケセセセと奇怪な笑い声をあげ始めたギルベルトをよそに、残りの二人は話し合う。

「これって他の国とか上司に話ても大丈夫なんか？」

「そしたら世界がパニックになるでしょ」

「ということはなんや、しばらくこの状態続けなあかんちゅうことか？」

「そついうことになります」

フランススが答えるとギルベルトが急に立ち上がる。

「となると他人にはれないようにいろいろしないといけないということか。まずは荷物を取りに行かなきゃな」

フランススも歩き始めたギルベルトの後を急いで追う。

残されたアントーニヨは

「これから先、どうなるんやろな……」

そう呟くと本来は他人のであるはずの銀色の髪をいじり始めた。

02 状況整理（後書き）

というわけで第2話です。

実は外見は仏、中身普というのをふと思いつき、だったら西を巻き込もうと妄想が膨らんでこうなりました。

しかし三人とも名前が長いですね（汗）

アントーニヨは一気に打つと予測変換が出て来ないので「アントー」・「ニヨ」となっています。ニヨってww

次回はぐだぐだになりそうです。
またよろしく願いします！！

03 三人だけの作戦会議（前書き）

いろいろごちゃごちゃしている上に展開が速いです。

本当に自分の文才のなさが目立ちますね（汗）

03 三人だけの作戦会議

フランスとギルベルトが荷物を手に再び席につくと、一番最初に発言したのはギルベルトであった。

「まず俺様から言わせてもらうぜ。こつ、言葉遣いとか癖とかを変えないといけないな、うん」

「いきなり難しいこというなあギルちゃん。でも的確な意見やな」

「お兄さんはあれだな。場所とか覚えなないといけないんじゃないかなと思うな」

「確かにそうだな」

「俺もそれに賛成やで」

どうやら意見をまとめるには考えていることがあまりにも大きすぎた。

「ああ、訳わかんなくなってきたぜ」

「あれや、さっきみたいに紙使ったらええんとちゃう？」

「さっきの紙あつたよー」

話し合いは予想以上に長引き一時間後。

「それじゃ、まずこれからの予定立てまーす。」

フランスはペラリとスケジュール帳をめくる。

「やっぱ大きいイベントは世界会議が一ヶ月後に控えてるみたい。

主催国は……っつと」

「フランスやったでー」

「…………俺様ってことか！？一回連続だぜ！？しかも普段なら世界

会議にでないはずなのに!？」

楽しすギルゼケッセセセセセと悲しそうに笑うギルベルトに

「可哀相やなー」

「ふふっ、さすが普憫」

二人は追い打ちをかけたようだ。

「まあとりあえず他にみんななんか予定あつたら順に発言して。ちなみにギル、明後日イギリスとアメリカとお茶会という名の会議だからお願いね」

「明後日かよ……俺様は特にねえな。アントーニヨ、とりあえず自由に行動してもいいぜ。」

「ほんまか!?それって樂園やんかあ……俺は毎日トマトの世話して造花作ってロウ、イと過ごして……あとたまにベルギーとかオランダも来るで」

「地味にアントーニヨ仕事多いじゃん。それじゃ次、部屋とかわかんないとヤバいから可能な限り書く。特にギルはルートとかローデの部屋の位置しっかり書いてね」

「なんでお前が司会になつているんだ」

スラスラと次の指示をいうフランスにギルベルトが疑問を浮かべる。

「お兄さんはみんなのお兄さんだからね!」

「なんかその言葉引くわあ」

「うん、今のトーニヨの言葉は聞かないことにしよう!」

「なんでや!俺は素直にいっただけやで!」フランスとアントーニヨが言い合いしてるうちにギルベルトは書き終え紙をアントーニヨに渡した。

「ほい。あんまし坊ちゃん部屋に入るとエリザが殴ってくるから注意しろよ。小鳥はなんでも食べるから何か買ってくか夕食の残りでいいぜ俺の小鳥何処だ?」

「俺んどこにいるで。」

「?じゃあ俺のどこにいる鳥は……」

「お兄さんピエールにフラれちゃった！！酷いわピエール！」

「……まあいいや、最後に俺様のパソコンとケータイ汚すなよ！これは絶対だからな！」

そういうとフランスに尋ねる。

「パリ行きの飛行機つてもうすぐじゃねえか？」

「そうじゃん！これお兄さんの荷物ね！ギルの分は財布だけでいいからね！あとでメールする！」

「お、おう！まあ明後日の会議は任せとけ！じゃあ、アデュー！！」
そう叫ぶとギルベルトは長髪をひるがえし走りさった

03 三人だけの作戦会議（後書き）

実はテスト勉強終わって布団の中でポチポチしていますw w

感想や意見貰えると嬉しいです。

よろしくお願いします!!

04二人だけの作戦会議（前書き）

悪友コンビです。

なんか普憫が不憫になり始めました。

04二人だけの作戦会議

ギルベルトが抜けるのを見送るとアントーニョが「そうや」とフランススに向き直る。

「何？」

「スペイン親分直伝のスペイン語を教えたるかなと思ってな」

「はあ……………」

楽しそうにするアントーニョに対してフランススの顔がわずかに曇る。

「教えるの何百年やろなあ。ロウイは可愛かったなあ、今も可愛ええけど」

「子分自慢はいいから。やるんだったら早めに終わらせたいでしょ？」

「せやな。ほな行くで」

こうして親分によるスペイン語講座が始まった。

「例えば『キスして下さい』という時は『キスしたって』というんやで」

「まさかとは思わないけどそれロウイノにも教えたの……………」
「……………」
「ほなリピートアフターミーや、『キスしたって』」

「リピートアフターミーで。き、『キスしたって』」

「うん、ええんとちゃう？ちなみに親分にはナンパ癖はないから変なことできるだけせえへんでな」

「そんなあ、俺は素敵なマドモワゼルに声をかけ優雅に食事をするのが好きなんだけど」

「子供とか可愛ええ子やったら許さないこともないんやけど」

「今あなたが変態に見えました」

「急に裸になって人の服を脱がしたりするフランのほうがよっぽどの変態や」

「な、俺知ってるんだからね！アントーニョがたまに子供の写真をフォルダに入れていること」

「なんでお前が知つとんねん！フランの変態さなんか美しさがあれば赤ちゃんからお年寄りまでなんでもOK！気持ち悪いっいたらありやしないで！」

スペイン語講座は何時しかどちらが変態なのかの口喧嘩に変わっていったようだ

「『ほな、さいなら』えつと、これでええんか、トーニョ？」「凄く上達しとるでフランシス！」

「まあね、お兄さん環境にすぐに対応できるタイプだからね」

あの喧嘩から経つこと数十分。フランシスはかなりできるようになったようであった。

「これで他人にはばれないんとちゃう？まあなんとかなると信じとるで。それはええとしてあとはトマトと造花作りやな。トマトはフランも育てたことあるそうやから問題ないとして、造花のほうは…

…確か俺の机の引き出しに説明書しまつてあつたはずや…うん」

少し……否、かなりあやふやな発言である。

「とりあえずギルちゃんのとこの三国の会議が終わるまで動けないね。」

「確かにそうやな。」

「俺も少しは案を立ててるからトーニヨも考えてね」

「まあとりあえずルッツやフェリちゃんやローデにばれないとええなと俺は思っとるでー」

少しの沈黙。

「……本当に考えておいて、ね」

「余裕があつたら考えておくで」

「それでは。コホン今の俺達の状況は普通なら有り得ない状況です」

「そうやな」

「しかしお兄さんはまた元に戻れると信じている！それは何百年と生きてきたお兄さんのただの勘だけど、それでもいろんな問題を少しずつ解決していこうじゃないか！」

「おおー！今、光つとるよフランスス！！」

「メルシー。さあ、力を合わせようではないか！俺達悪友の栄光のために！！」

フランススは手をスツと差し出す。

「ああ！そうやな！」

アントーニヨがフランススの手の上に手を重ねた。

「「オー！！！！」」

そして気づいた。

「あ、ヤバイ」

「ギルを忘れとった」

そして

《ごめんなギルベルト。》

二人は心の中で謝った

「んじゃ、俺は行くで。ほなまたな、アントーニヨ」
フランスはアントーニヨになりきろうとしているがまだ何か物足りないようだ。

「ふふっフランスもなかやかな。」

アントーニヨは一度大きく息を吸い込むと

「ハハハハハ！ー今から俺様はギルベルトだ！まずはルッツのここに行こう！」

そういい数少ないギルベルトのケータイのアドレス帳からルードウ・イツヒに連絡を入れた

一方フランスになったギルベルトはというと。

「フランスとアントーニヨ絶対なんかしてるんだろっな。」

……………

…姿変わっても一人は楽しいぜ」
かなり寂しいことを呟いていた。

三人の珍事は始まったばかり。

04二人だけの作戦会議（後書き）

この次から

ギルベルト
小鳥編

アントーニヨ

トマト編

フランシス

薔薇編

の3つに分かれます。

とりあえず一番書きたいので小鳥編から行きます。

感想アドバイス待ってます。

小鳥編：彼とコーラとハンバーガー（前書き）

題名で分かるかもしれませんが

あの人が出てきます。

小鳥編：彼とコーラとハンバーガー

そして三人が別れた次の日

フランス宅にいるギルベルトは一通り部屋を確認しあるものを探していた。

「くっそ、ここにある酒ほぼ全部ワインじゃないか」

ギルベルトはワインも嫌いではないのだが

「やっぱビールのほうが旨いよな。そしてウゝルスト！……畜生食べたくなってきた」

ビールのほうが好きなのだ。しかしここはフランス。ビールとヴルストの組み合わせではなくワインしかないのだ。

探していたビールを諦め、昼食作りに取り掛かる。

幸い幾つかの料理のレシピをフランスからメールで貰っていたのでそれに習い作っていく。

完成した料理はなかなか上手くできたんじゃないかとギルベルトは我ながら感心した。

「一人で頂くの楽しすギルぜ！」

そついい魚を切ろうとしたその時

ダーン！ガタン！

という奇怪な音とともに

「H A H A H A H A！」

という笑い声。誰かが侵入してきたようであった。

ギルベルトが音のしたほうへ駆け付ける。

そして目に映ったのは――

まず無惨な姿になってしまった玄関のドア。中央に大きくくぼみができている。

そしてもう一つ、いやもう一人。

「フランス、お邪魔するけど反対意見は認めないんだぞ」

そう高らかに発言するアメリカ―アルフレッド・Fジョーンズ―の姿があった。

「どうしたんだいフランス？早く中に入れてくれよ」

それがアポ無しで他人の家に突入する人の態度かと思ったギルベルトだがそれ以前に聞きたいことがあったので質問することにした。

「このドアの残骸は何？」

「ああこれのことかい？インターホンが見当たらなかったから強行突破を決めたんだぞ」

ドアを破壊するなんてアルフレッドの力はこんなに凄かったのかとギルベルトは恐ろしくなった。

一方アルフレッドは吸い寄せられるようにキッチンヘダッシュ。

「W A O！これ君が俺に作ったのかい！？気が利くね！それじゃ遠慮なくっ」

「ちよっ待つて！それお兄さんが必死に作ったの！食べちゃだめえええー！」

ギルベルトの叫びは届かない。アルフレッドは「うるさいなあ」とか「これだから中年は嫌いなんだぞ」と食べ物を含みながら文句をいう。

「全く……自分の分作ってくるからさっきみたいに暴れないでよ」そう断っておくと再び作り始めた。

アルフレッドは独立戦争の時代に戦いを教えにきたときに知り合っただけだ。

自分でも結構ハードな訓練であつたと思うがそれでも独立のために頑張るアルフレッドの姿は凛々しくさすが国であると感心もした。それが今となつてはA K Yの超大国。ある意味凄いと改めて実感した。

そしてアルフレッドを探すと

「ああフランス、Wii借りてるよ」

確かあれは『日本の最新のゲーム機です。ソフトも増えますし持っていて損はないので買うでゲイツ』と本田菊に勧められ買ってしまったものだ。フランスも買っていたのか。

「そういえば何でお兄さんのとこに来たの？」

ギルベルトは不意に感じたので質問してみる。

「特にやることないからさ！明日はロンドンに行くし今日はパリでいいかなつと思って」

言葉の間にコーラをすすする音、ハンバーガーを食べる音が混じっている。非常に聞こえにくい。

画面に目を向けると赤い帽子をかぶったひげのおじさんがコースをクリアしていた。

「今日昼にパリ歩いてたらおいしそうな店があつたから夕ご飯はそこにしなかい？」

無論フランスの奢りだぞと付け足す。

ちなみに自分の財布をこれ以上寂しくさせたくはないギルベルトはあっさり断った。

「フランスのケチ」

「わかったわかった。代わりといつちやあなんだけどお兄さんリクエストに応えてあげるよ。何がいい？」

少し考えるアルフレッド。そして

「ハンバーガーに決まってるんだぞ!!」

「やっぱりね」

知らない人もいるかもしれない。ハンバーガーは今アメリカの代表的な食べ物となっているがその元をたどればドイツあたりなのだそうだ。

ギルベルトも時折作る。

「じゃあ早いけど夕食の準備しようか。」

「昨日美しい女にでもあったのかい!?今日はやけに優しいじゃないか!」

「ま、まあね。さっ早くお肉焼かないとね」

そんなに自分は優しくしていたのか、それともフランスが酷いだけなのか。

その時ギルベルトの携帯が鳴った。

「ちよつと電話長くなりそうだから後はお願いね」

「了解なんだぞ」

その電話はフランスからであった。

『もしもし、ギルちゃん?俺だよお兄さんだよ』

「よおフランス、どうした？」

『だってやることは造花製造とトマト栽培。赤だらけで目がおかしくなりそう』

「目があああみtainな感じが」

『某大佐のアレね。……でどんな感じ?』「アルフレッドが来てる。今ハンバーガー一緒に作ってる。なんか小さい頃のルツと過ごしてる気分になったぜ」

『へえ……怪しまれてないよね?』

「気にするな。あいつにはやけに優しいと言われたただだ」

『そうなんだ。まあ明日は会議頑張ってね。冷蔵庫にあるケーキ持っ
っていつていいから』

「おう、了解したぜ。ちなみにフランス……アルフレッドがお前
ん家の玄關壊した」

『……ちよっ待つて!!お兄さん全く把握してないけど!!?』

「アデュー」

強制的に切った。

そしてキッチンに戻ると大量のハンバーガーがお待ちしていた。

「何この量!?!お兄さん無理だからね!!」

「H A H A H A! ドントウォーリー! 俺が全部食べるんだぞ!!」

小鳥編：彼とコーラとハンバーガー（後書き）

ちなみに最初はすぐに三人の会議シーンにして味覚音痴兄弟を同時に登場させる予定でしたが、AKYが頭の中で

「俺が最初に出るべきなんだぞ！！」と叫んでいました。

キタユメさんにもプロイセンとメリカの二人のシーンありましたね

……

長めになりましたが反省も後悔もしてねえあるよ。（↑）

次はかなり書きたいシーンとなります。

ぐたぐたですが温かい目でハツ橋に包んで下さい。

コメント、感想お待ちしています！！

小鳥編：L e t ' s g o L o n d o n t o e a t f i s h a n d t

タイトルをつけるセンスと英語力が欲しいです。はい。

寝ているギルベルトのお腹に何かの衝撃がきた。
仕方なく目をうつすら開けると

「Good morning! フランスス!」
アルフレッド。

とりあえずギルベルトは素早く状況を整理。

「俺はフランスの姿になっている。それは昨日の朝もそうであったが昼過ぎにアルフレッドが玄関に突入してドアを破壊。夕ご飯はハンバーガーで腹を壊しかけた。そして今日はイギリス・アメリカ・フランスの合同会議。ケーキを持っていくように――

「いつまでボウツとしてるんだいオッサン? お腹がすいたんだぞ」

「分かった、分かったからお兄さんのお腹の上に乗ろうとしないで痛い痛い! お前体大きいんだからやめて! お願いします!!」

体重がかなりあるアルフレッドが腹の上に乗ったらひとあたりもない。

――しばらくお待ち下さい――

「トーストとサラダとスープとコーヒーなんてメニューがありきたりだし量が少ないんだぞ」

「文句があるならイギリスに行けb」

「どうせ後に行けるじゃないか。」

アルフレッドはかなりのスピードでギルベルトの用意した朝食を完食しハンバーガーの包みを開けるが……。

「君コーヒーしか飲んでいないじゃないか! オッサンの体力は大丈夫なのかい?」

「お兄さんはあなたが凄い量食べているから見てるだけでお腹が

いっぱいです」アルフレッドの質問に棒読みで答えるギルベルト。アルフレッドはいつの間にかギルベルトの朝食も食べていた。

「さてと。準備準備。」

朝食の片付けも終えスーツを用意する。

そもそもギルベルトは会議に出る必要がないため、スーツなどをあまり着ないのだ。

「会議に行く服にはなんか派手だな」

この前のフランススの服もやけに派手であったことを思い出す。とりあえず白い生地に着く細い線が入っているワイシャツに紺のジヤケットとズボンを選ぶことにした。

そして昨日フランススがいていたケーキを冷蔵庫から取り出す。ちなみにシフォンケーキである。「シフォンケーキだから生クリームが必要だな……向こうで作るか。」

ケーキは向こうで準備するようだ。

アルフレッドもスーツに着替え終わっていたようでキッチンで今度のはDSをいじっていた（確かこれも本田に勧められ買ってしまったものだ）

「ほらそんなことしてないでイギリスに行くよ」

「そんなことはひどいじゃないか！今重要な場面なんだ！」

昨日のウィーもそうだったのだが勝手に進めている。果していいことなのか悪いことなのか。

ギルベルトは引っ張ってアルフレッドを連れて行こうと試みるがなにしろ相手はアルフレッド。悪くいえばメタボな彼は山の如く動かない。

「今行けばあっちでミートパイ奢るよ」

「……………」

「ボロネーゼ」

「……………」

「…カレーでどうでしょうか」

「イギリスん家の料理まずいから嬉しくない」

「それじゃああとあそこで美味しいのフィッシュアンドチップスしかないじゃん」

ギルベルト絶望。

「ちよつと待つんだぞ！！フィッシュアンドチップスってあの美味しいやつだろ！？食べる！食べるよフランスス！そ、そうとなつたらいざ出発だロンドンへ！！」

ギルベルト呆然。

その間にもアルフレッドはダッシュし荷物を持って来る。

「よし準備完了だ。行くぞフィッシュアンドチップスのために！！」
力が強いアルフレッドに引つ張られながらギルベルトは考えた
「行くのはイギリスとの会議のためだぜ」

パリからロンドンというのはドーバー海峡にトンネルが作られているために時間があまりかからない。

二人は予定時刻より早くロンドンに着きゆつくりと昼食のフィッシュアンドチップスを食べていた。

アルフレッドは奢りだと知っているので遠慮なく食べる。積み上げられた皿がまさに今二桁を越えた。

「費用が……………」

後でアントーニョからお金を送ってもらおうと思ったギルベルトであつた。

「じゃあ俺ハンバーガー買ってくる！」

アルフレッドはその近くのハンバーガーショップにダッシュする。

かなりの量を食べたのにまた食べるから太るのではないだろうか。

そしてロンドンの目的地へと到着する。

「坊ちゃん家……なんか雰囲気がいっつもより怖くない？」

「フランス……俺もそう思っただぞ」

表現するなら幽霊屋敷や魔女の館、だろうか。とにかく恐ろしい空気を漂わせていた。

その中に更に怪しい人影。薔薇園の端を歩く黒いロングコートを着た不審人物。

「不法侵入……かな」

二人は同時に呟いた。

とりあえずばれないように追おうと決めたその時。
いきなり人影は振り向いた。

「……お前ら」

そう呟いた人影は不法侵入したのではなく

「なんだよお前から来てたのか！」

イギリス―アーサー・カーランド―であった

小鳥編：L e t ' s g o L o n d o n t o e a t f i s h a n d t i

フィッシュアンドチップスって美味しいんですね……食べたいな。

ちなみにヘタリアではイギリスが一番好きです。それに日本・プロイセン・イタリア……と続きます。不憫たちが大好きな傾向。

次もきつとギルベルトですかね。不憫ズなのでノリノリで書きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3465ba/>

トマトと小鳥と薔薇と

2012年1月14日17時54分発行